

第5回 立川市新校舎建設マスタープラン検討委員会

日時 :平成28年11月18日(水) 18:00~20:00

場所 :けやき台小学校 視聴覚室

出席者 :

【検討委員会委員】 ■長澤委員長 ■富永副委員長 ■菅原委員 ■小林委員 ■佐藤委員

■須崎委員 ■星野委員 ■大野委員 ■藤縄委員 ■山田委員

■堀江委員 ■栗原委員(教育部長) ■吉岡委員 ■宮城委員

■飯塚委員 ■梅津委員 ■白井委員

【市職員】 ■小林課長(施設課) ■田村課長(学務課) ■神崎課長(子ども育成課)

■小瀬課長(指導課) ■矢ノ口課長(教育支援課)

【事務局】 ■庄司課長(教育総務課) ■中島(教育総務課)

【策定支援業者】(株)豊建築事務所 ■田中 ■奥澤 ■高柳 ■表 (以下敬称略)

開催に当たって

- ・配布資料の確認。

1 前回の検討委員会とワークショップについて

- ・事務局よりワークショップについて報告を行った。
- ・委員長より少人数での開催であったが、活発な意見や提案がなされたことの補足があった。また、未就学児の保護者の方々への案内が不足していた点を指摘いただいた。

2 新校舎の理念について

- ・事務局より第一小学校の例について説明を行った。
- ・策定支援業者よりアンケート等の集計結果について報告を行った。
- ・策定支援業者より理念の素案を説明した。学校づくりの理念を、「共に学び 共に 育つ 学校づくり」とし、コンセプトとして
 1. 思う存分体を動かし、様々な体験ができる学校づくり
 2. 学ぶ楽しさ、教える喜びが実感できる学校づくり
 3. 明日また行きたくなる楽しい学校づくり
 4. 地域をつなぎ、未来を拓く学校づくりが提案された。

<主な意見>

【委員長】 これまでの意見を踏まえて、大きな理念として、「共に学び 共に育つ学校づくり」という学校づくりの理念として、それを構成する4つのコンセプトに整理してあると思う。この新校舎については、2つの学校が1つになるという機会を通じて、地域も含めて、共に2つの地域が共に子どもたちを育てていくこと。子ども同士が共に学び、共にお互いのよさを認め合いながら成長していく。それは障害のある人も含めて、共生社会となること。といったテーマがあるように思うが、よりよい表現の仕方や、足りないところなどはあるか。

【H委員】 兵庫県豊岡市立弘道小学校の事例について、木造で迷路みたいな学校で、子どもたちが毎日通うのにもわくわくして、楽しい学校と言われている例があった。また、富山県小矢部市の中学校の例や奈良県宇陀郡御杖小学校等、面白い例がある。また、公立小中学校のトイレの便器の57%が洋式化されていないことが新聞に掲載されていた。学校は上下足を履き替える習慣があるのはなぜか。

【委員長】 弘道小や御杖小は町内の3つの小学校を統合した学校の計画。関心が高く、たくさんの方が参加して議論した計画。学校は既存の建物が多いことから、和式の比率が高い。それが子どもの生活や、災害時の高齢者とか障害者のトイレ利用が不便で、トイレに行かないようにするために水分や食事をとらず我慢をすることから体調を崩す。トイレを快適な空間にしていく、あるいは交流空間にしていくという側面と、便器をどうするかということ、総合的にトイレ環境を良くしていくには大きなテーマである。前提条件で、立川市は方針として学校のトイレは全て洋式化することによりか。

【事務局】 全て洋式化ということで考えている。

【委員長】 履きかえについては、住文化の問題や、グラウンドで運動した子どもたちの靴で校内に汚れを持ち込むことに加え、低学年の場合は床に座っている活動をしたりすることがある。衛生的に落ちついた学校をつくりたいということで、履きかえが小中学校では一般的に行われていると思う。小学生にとって床は1つ非常に大事な生活空間である。

【C委員】 ICT教育やアクティブラーニング等、これからの動きに対してのアプ

ローチ、教育の場としてどうあるべきか。これからの人材育成として、どのような子どもたちを育てていくか、先生方に学校づくりの中で見通せることを教えて欲しい。

【小瀬課長】 1点目は、アクティブラーニング。主体的、対話的に深い学び。主体的な学びというのは、自分のキャリア形成に結びつけながら学習するという事。対話的な学びというのは、友達同士、先生、地域の方々や、文献を通して過去の先人の考え方と対話をする。それが対話的な学びということ。深い学びというのは、自分なりに国語、社会、算数で学んだことを、自分の中で再構成して、もう一つの見方、考え方を知るということ。これらがアクティブラーニング。子どもが学びの方法をどうやって習得していくのか、プロセスにもっと目を向けるということ。

2点目は、学校教育がより社会に開かれ、具体的な教育活動の説明をしていくということ。地域の人的・物的資源を授業に効果的にさらに活用していく必要がある。それがもっと開かれた教育課程となる。

3点目は、カリキュラムマネジメント。学校は1年間で学校の教育活動を評価していたが、今は変化が激しいので、PDCAを速く回して、短期的に改善を図れるようにするというのが大きな教育の流れである。教育委員会としては、社会との連携として、ネットワーク型学校経営という視点で、学校だけで終結するのではなく、いろんな教育機関、関係機関とネットワークを結び、その力を活用しながら、さらに効果的な教育活動ができるようにというのが立川市の向かっているところである。

【C委員】 普通の一般的な教室のスタイルである一人一人の机があって、1人のそういうずっと踏襲されてきたそのスタイルというのがむしろ制約になってくる可能性があるかと思うが、先生方はどんなふうに見据えているか。

【小瀬課長】 今までは、みんな黒板のほうに向かって授業を行ってきた。これからは、主体的、対話的学びとして、グループになり、自分はタブレットを持っていき、話し合いをする。活動は大きく進歩しないが、グループ形態も、今まではグループというといつも4人。これからは8人とか、今日は大人数で、10人でというふうに形態は変わってくる。

【C委員】 アンケートの中にも、みんなで使える机があるといいという意見もあり、

海外の建築とか学校建築の例では、共同学習、みんなで輪になって勉強する島がある。教育のこれからの新しい流れに対応していく観点も含めたような観点があっても良いかと思う。

【栗原委員】 建替えた第一小学校のマスタープランには、メディアセンター構想という考えが盛り込まれている。パソコン室と図書館を一体として利用する構想だったが、ICTを取り巻く環境が変化したことから、小学校、中学校でタブレットを入れるようになり、今ではタブレットのほうが中心になっている。

【C委員】 理念レベルでの話として、少し先のことにも対応が必要という観点を持っているものを表現しておき、改修等も基の理念に沿った形でしていくことが正道であると思う。学ぶ楽しさ、教える喜びというコンセプトの下に、学習環境の充実というのと並んで、その新しい教育方法もチャレンジしていく、新しい情報を積極的に導入するという、新しい教育方法に対する対応という部分を入れておいてはどうか。

【委員長】 コンセプトをもう一つ増やしたほうがよいという場合には、また検討する。将来を見据えたというところについて、更新していくことになると思う。1つ目が、「思う存分体を動かし、様々な体験ができる学校づくり」についてこれまで出された意見が、できるだけ屋外スペースを確保して運動スペースを充実させる。それと同時に屋外学習環境を充実させるということ。2つ目の「学ぶ楽しさ、教える喜びを実感できる学校づくり」については、さまざまなグループがつくられることに関して、自由度の高い空間等、発表、相談の空間。教員の執務環境。それらの空間を時間軸の中でのフレキシビリティをどう確保するかということを書き出していく必要があるのではないか。3つ目の「明日また行きたくなる楽しい学校づくり」については、居心地のいい場所、豊かな環境をつくるということ。食育やトイレ等の生活の居場所を改善していく。ベースにあるのは安心・安全ということだとも思う。「地域をつなぎ、地域の未来を開く学校づくり」については、地域で子どもを育てる、学童保育所等の複合化、災害時の防災拠点としての役割、学校を支える地域ボランティアの活動の場等があったと思う。

【0委員】 1つ目のコンセプトのところで、体育館の屋上にプールを設置という案で、屋上にプールを設置した場合に、大規模地震が起きた際、どの程度の震度まで耐え得るものなのか。

【策定支援業者】 学校の場合は、建築基準法で定められている建物の強度の1.25倍の強度をもってつくるという決まりがある。簡単に説明するのは、6強ぐらいまで耐えられます。震度7が来ても壊れることはなく、子どもたちが安全に逃げられるような計画になっている。

【小林施設課長】 一般的に耐震性能をあらわすときにはI_s値で示している。一般の6強に耐えられる程度の物がI_s値では0.6という数字が基準になっている。今回の場合は学校ですと1.25を掛けるという形になるので、0.75。6強に対して、一般的にいうと1.25倍ぐらいの強度を増すようなイメージは持って良いと思う。但し地震面からいうと、上部にプールを配置した場合、耐震性能上はよくない形である。当然その下を大きく補強して耐震性能を持たず形になる。建築費は高くなる、若しくはメンテナンスにお金がかかってくるという形になると思う。今検討しているスペースの観点から、プールが上部にあることが最適ということであれば、今後検討しなければいけないということになる。

【K委員】 下にプール、上に体育館は配置の可能性はないか。

【小林施設課長】 プールが屋内空間になるので、空調や温水などの検討も必要になると思う。

【A委員】 プールとか体育館の存在は、学校教育だけで考えるところと、地域に開くという考え方がある。理念にかかわって、何を優先していくかということだと思う。

【委員長】 最上階に持っていくということでグラウンドの面積を確保でき、のぞきなどの安全性も高めることはできるが、構造コストや、プールを夏休みに子どもたちが使う際や、地域が使うという場合は、スムーズなバリアフリーの動線を考えなければいけないと思います。

【P委員】 理念について、学ぶ楽しさは子どもたち、教える喜びは先生方。方向性是一緒かもしれないが、理念として相反するような気がしている。先生方から見て、この子たちが成長していくという過程を見るのが教える喜び。

子どもたちは自分たちが学校の環境の中で何ができて、学ぶ楽しさ、それが一緒に理念の中にあり、校舎がこういうふうなものができるというのが全然わからない。

【A委員】 コンセプトの学ぶ楽しさは、相対するというよりは、両方が一緒になってここに向けてやっていきましょうという考え方。対比ではないので、校舎をつくる際に、両者が楽しくなければできないという理念だと思います。

【P委員】 学ぶ楽しさ、教える喜びという中でいう環境、教室をつくるコンセプトの次に、明日また来たいという居心地のよい生活空間という言葉がある。学ぶ楽しさが体感できる学校づくりと教える喜びが実感できる学校づくりがまた別にあったほうが、理念はそれで方向性が一緒であればいいという感じを受けている。子どもたちは楽しければ毎日来ます。

【委員長】 楽しいことのベースは、学校に関しては学ぶことの楽しさだと考える。

【G委員】 2つめは、勉強することも楽しいし、先生も教えることが楽しい、勉強に対する楽しい学校づくりというか、大切な学校づくりであって、3つめは、勉強以外でも学校そのものに魅力のある学校ができたらいいい みたいな形の、2と3の意味合いでとらえている。

【栗原委員】 G委員と意見に近いが、学校は学ぶ場ではありますが、子どもたちが日中生活する場でもある。2番目の学ぶ楽しさ、教える喜びと、もう一つは生活空間としてある。例えば木質化の場合、子どもが落ちつける環境の中、トイレ等、子どもたちが生活をする中で楽しい学校で、毎日行くのが楽しい。もしかしたら勉強じゃなくて、本当に学校に行って友達といるだけでも楽しい、という事を表現しているというイメージがある。

【委員長】 学校づくりの理念として、明日また行きたくなる学校ということでコンセプトとして、その中には生活の場としての居心地のよさとか、居場所としての居心地とか、それから、学びの楽しさとかというのが全部包含されるという、そういう捉え方も当然あると思う。ここでは教育というところを1つコンセプトとして見えるようにしておくのが、それを分けているということの意味ということで、進んでいきたいと思う。

3 新校舎のゾーニング案について

- ・ 策定支援業者より説明を行った。

<主な意見>

【K委員】 SRC造ではなくRC造と考えてよいか。(※SRC：鉄骨鉄筋コンクリート造 RC：鉄筋コンクリート造)

【策定支援業者】 SRCを用いなくても鉄骨でできるような計画に、それに頼らなくてもできるような計画になっている。

【K委員】 要するに、優しい考えだったら、鉄骨構造にして、木で張ったほうがより何か親しみやすいんじゃないかというのものもあるのではないか。

【委員長】 今の段階で、RC造という話ではない。コストとか合理的意味合いとか、総合的にこれから検討していく。

【E委員】 A案、B案、C案の、真ん中のバツテンのところというのは中庭みたいな、空洞のところというか。

【策定支援業者】 吹き抜けである。建物に囲まれている外の部分。

【P委員】 建物内の灰色に囲まれた部分は何を示しているか。

【策定支援業者】 これはトイレや更衣室等、教室ではない空間をグレーにしている。

【P委員】 B案で、学童保育所が南側に配置されている理由は。

【神崎課長】 学童保育所は、学校の中の教室をお借りして運営しており、全ての教室が南側を向いている。土曜日が年間に50日程度あり、1日保育が、夏休み、冬休み、春休みに40日程度ある。学童に来ている子どもは、年間90日をお部屋の中で過ごすことになる。太陽の光がまるで入らないのは、子どもの環境には厳しい。学童の子どもも学校の子どもと一緒にです。できれば南を向いた部屋としたい。

【P委員】 C案の場合、教室が東側に来る。2、3階は隣の団地で東側の光が入ってくるのか。

【策定支援業者】 光は入るので問題ないと思っているが、団地からの視線については、懸念事項としてあると考えている。

【委員長】 今日は、このうちどれがいいということでもない。配置を考えるときに考慮すべき点を話すうえで、案があるということで。考えなきやいけないということは設計者として受けとめていただけたらと思う。

【M委員】 支援学級と学童が隣接しているところで、学童へは1年生、2年生もきます。4時間や5時間の授業が終わって、学童に行く場合、支援学級の子どもたちは6時間目まで授業を受けている子どもたちもいる。どちらを優先するのかというところは考慮しなきゃいけないと思う。

多目的室のとり方について、B案、C案は、小さな多目的室というのが2カ所、各階にとられている。子どもたちの学習環境では、小さい部屋より、学年で集まれる教室等、これからの学習形態ということを考えたときに、グループでの活動の事を考えると、ある程度まとまって広い教室環境というのがあると便利と感じた。

【委員長】 理念でも多様な学習に対応できる自由度の高い教室というのがあるわけで、それに対して、教室の並びの小さい部屋でそれが対応できるのかという点についてどのようにイメージされているか。

【策定支援業者】 教室が3つ並んでいて、その廊下側にオープンスペースというような形で考えている。

【委員長】 絵であらわしている部分がちょっと食い違っているかもしれないので、配置で示す場合は、今の説明の表現にしておいていただいたほうがよいのではないか。

【E委員】 参考であるならば、高さがどこまで来るといえるものが、あったほうが良いと思う。比較対象として、隣の団地の高さ比べたらこうなる等。

【栗原委員】 4階建ては高さがどのくらいですか。

【策定支援業者】 15m～16m程度。

【委員長】 周辺環境の高さ等との関係で今度の校舎がどうかというのが、皆さんイメージが持てるようにしていただければよいのではないか。

【L委員】 屋上のことは、今回から入ってきた要素かなと思う。屋上を児童に開放していないと思うが、新しく学校の場合、屋上というのはこういう原っぱのように活用していくものか。先生方の安全管理等も、心配されると思う。

【委員長】 屋上をつくる場合には、目が届かないことによって不安もあるので、つくる場合には、設備的な対応である程度先生方が安心できるやり方か、先生のいるような部屋がある等、誰かの視野に入るので、比較的安心して屋上が使えるということもある。屋上を利用するルールというのを先につく

る等の考え方はあると思う。

【Q委員】 図面の見方がよくわからない。4階の平面図があるけれど、A案もB案もC案も全てプールは4階だという前提で作られているのでしょうか。

【策定支援業者】 1階に設けて、上に体育館という案も検討したい。

【D委員】 図面だけでわからないので、わかりやすい説明をしてほしい。例えば、今の校舎から何メートル離れている等がわからないので、書いてほしい。

【委員長】 ラフに何かボリュームがわかるような模型みたいなのがあってもいいでしょう。完成模型というほどではなくて、大きさの感じをつかめるものを用意してほしい。

4 次回日程について

①第6回新校舎建設マスタープラン検討委員会

日程：平成28年12月21日（水） 午後6時～8時

- ・第4回の検討委員会の議事要旨について、訂正の有無を確認。11月30日に立川市のホームページに掲載する旨を伝えた。
- ・検討委員会で議論して決まってきた事について、12月議会、12月14日に報告する旨を伝えた。